

発 行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

山岳部長の交代と山岳部支援体制について

会 長 大野義照

本年3月末で山岳部長の奥山常務理事が大阪大学を定年退職し、新しい山岳部長を選任することになりました。

大阪大学体育会に所属の部の部長（顧問）は大学の教員でなければならないという規定があります。これまでにも篠田軍治先生が退官の後、山岳部出身でない恩地裕先生、続いて山田朝治先生に部長をお願いしたことがあります。この度は奥山部長の退職に伴い、奥野龍禎先生に奥山部長から後任のお願いがありました。奥野先生から内諾をいただいたうえで、奥野部長のもとでの山岳部支援体制を元部長という立場で奥山部長と検討しました。

恩地部長、山田部長の時代は部員も多く、山岳部出身の若い教員や院生もいたので、特にOB（以下OGを含む）からの山岳部支援の体制を検討する必要はなかったのですが、現在は登山を目指す部員が少なく、しかもリーダーは2年生がつとめており、手厚い山岳部支援が必然の状況です。

奥野先生は中之島山岳部出身で4月からは同山岳部の部長をつとめられています。当山岳部に対してもご理解をいただいていますが、山岳部の日常の活動まで指導・助言をお願いすることはできません。奥野先生には部長（顧問）でないとできないこと（学生課、体育会からの連絡窓口および山岳部から体育会への活動報告、山岳部未来基金の決済）をお願いし、山岳部の活動に対する指導・助言は山岳部OBで分担して行うことになりました。

日常の山岳部の活動支援は、これまでも奥山部

長のもとで支援してきた、あるいは山岳部員が実質ゼロの時に森藤部長のもとで支援してきたOBにお願いすることにしました。その皆さんに草尾理事他10人のActive OB（山岳部支援）メンバーです。部員ゼロの時に山岳部支援委員会の委員長だった明神副会長に監督としてActive OBメンバーをまとめてもらいます。Active OBメンバー内で相談して登山だけでなくボルダリング、リードのすべての活動を対象に役割を分担して支援をお願いします。

なお、Active OBメンバーから山岳部担当理事を選出します。Active メンバーは固定したものではなく、適任者には隨時加わってもらいたい。

また、奥山前部長にはActive OBメンバーの代表として監督とともに新部長とのパイプ役をつとめてもらいます。

本体制において重要な役割は、山行など学外活動計画のチェック・承認です。大学は部長（顧問）に活動方針・計画、管理・運営面および安全管理に対する学生への指導・助言を求め、何らかの事故発生の危険性を具体的に予見することができる場合には、回避に向けた指導・助言を求めています。監督を含めたActive メンバーで指導助言を行い、承認に至った活動計画を監督から奥野部長にお伝えすることにしています。そして計画は部長から学生部に届けられます。部員の自主性を尊重しながら安全な部活動を目指しています。



5月新勧山行は、はじめにリーダーから西穂岳登山および岳沢での雪上訓練計画が提案されました。Active OB メンバーの3人がコーチ役として参加することを前提にWeb会議で検討し、部員の経験とコースの難易、雪崩の危険性を勘案して、涸沢での合宿とし、雪上訓練の他、雪山経験の有無よって北穂岳登山と前穂高北尾根5、6のコル往復の2組の活動内容を決定しました。

大学からは活動中の事故について、部長に第一報が届いた場合には、学生に対する次の項目に関する助言が求められています。負傷者の確認、関係各所への連絡、救急車、学生部への連絡、家族への連絡。これらの点に関しても監督以下 Active OB メンバーで対応します。

事故時の大学との連絡調整（顧問・監督）、連絡網（山岳部部員リスト、山岳会会員リスト）、捜索隊：監督、山岳会、Active OB メンバー、捜索資金：山岳保険、山岳会資金（遭難対策資金）に関しても山岳会と調整しながら本体制で対応していきます。

以上、山岳部支援体制について紹介しました。数年後には山岳部課外活動への Active OB メンバーの参加は不要になることが期待されますが、その他の点については本体制で山岳部を支援していきます。会員の皆様のご理解とご協力をお願ひいたします。

山岳部長就任にあたって

新山岳部長 奥野龍禎

4月より阪大山岳部長を拝命いたしました奥野龍禎と申します。平成8年に大阪大学医学部を卒業し、現在は大阪大学脳神経内科にて、臨床・研究・教育に携わっております。学生時代は中之島山岳部に所属し、この4月からそちらの部長も務めております。体育館のクライミングウォールの修繕や、遭難対応で前任の奥山教授とご一緒したご縁から、このたびお声かけをいただきました。

大阪大学山岳会は、戦前から続く長い伝統を有し、ヒマラヤやカラコルムへの遠征をはじめとする輝かしい歴史を築いてこられました。その重みを思うとともに、このたび部長をお引き受けするにあたり、身の引き締まる思いでおります。

登山には少なからず危険が伴いますが、仲間とと



もに大自然に向き合う中で得られる感動や達成感、一体感は、他のスポーツでは味わえない特別なものです。また、練習を重ね、難度の高いクライミングをやり遂げたときの喜びもひとしおでしょう。部員の皆さんには、十分に安全に留意しつつ、学生時代ならではの挑戦をぜひしていただきたいと思います。

阪大山岳部と山岳会の活動が、今後ますます安全で充実したものとなるよう、微力ながら尽力してまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

山岳部長退任にあたって

前山岳部長 奥山宏臣



森藤君より部長を引き継いだ2020年度は、コロナで課外活動が全くできない状態からのスタートでした。大学の講義はほとんどがオンラインとなり、計画していた5月新歓、8月夏山合宿も全て中止となりました。体育馆も閉鎖されましたのでクライミング壁も使用できず、個々の自主練習という形を取らざるを得ませんでした。それでも4名の新人が入部してくれたのは数少ない明るい話題でした。2021年度も引き続き合宿は禁止でしたが、10月には久しぶりに学生を誘って白山へ沢登りに行くことができました。2022年夏になってようやく課外活動としての合宿が解禁されましたが、8月に予定した沢登りは悪天候のためやむなく中止となってしまいました。しかし翌2023年からは、長かったコロナの鬱憤を晴らすような好天に恵まれました。1月比良山、5月白馬岳、8月赤木沢、2024年5月立山、8月薬師沢と、いずれも雲一つない空の下、学生とともに雪山や沢登りを満喫することができました。また大変嬉しいことに、2024年度に入部してくれた登山志向の1年生5名は、寒さに負けず冬の八ヶ岳や燕岳にも入り、1年間山行を続けてくれました。

そして2025年度からは、クライミング班、リード班、登山班に分かれて、それぞれのリーダーのもとでの活動が始まりました。各班の交流も活発です。今年の5月には、登山班の新人3名とリード班2名を加えた新歓合宿が涸沢で行われました。“個人の嗜好に合わせて色々なスタイルで山登りを楽しむ”、という新しい山岳部の形ができつつあります。

在任中の忘れられないイベントとしましては、

2024年6月15日に吹田キャンパスの銀杏会館で山岳会創立75周年記念祝賀会を開催しました。参加者は59名（OB30名、現役19名）と関西だけでなく遠方からの参加も多く、久しぶりに懐かしい方々にお会いすることができました。これまでの活動や海外登山の報告などもあり、改めて山岳会の歴史を振り返る良い機会となりました。会の後半では、尾川とも子氏（日本人女性初のプロクライマー）、和田城志氏（大阪市立大山岳部OB）の両氏にご講演いただき、OBだけでなく現役部員も多いに刺激を受けました。また今後に向けてはグレートヒマラヤトレイル全踏破計画の紹介もあり、盛りだくさんな内容となりました。そして何より、廃部の危機を乗り越えて、みんなで75周年をお祝いできた嬉しい集会となりました。

私が退職後は、体育会山岳部OBは大学にはいなくなるため、中之島山岳部OBの奥野龍禎先生（神経内科）に後任の部長をお願いしました。奥野先生にできるだけご負担をかけないよう、引き続き山岳会が中心となって山岳部の活動を支援してゆく所存です。

3つの班に分かれた山岳部の新しいスタイルはまだ始まったばかりです。これを機に山岳部の活動がよりいっそう広がり、“山登り”という特別な経験を、多くの仲間と共有できる場となることを何より願っております。もちろん課外活動として安全に楽しむためには、基本的な登山技術の習得が必須です。OBの皆さんには引きつづき温かいご支援を賜りますようお願いして、私の退任の挨拶とさせていただきます。

現役支援担当として

明神 知

草野理事の事故により、監督として現役支援に

について思うところを述べる。

現役部員の現状は新人が17名入部し、総勢36名（+留学生11名+在学中OB6名）となった。

その構成は登山班7名、リード班、ボルダリング班合わせて29名である。

現在の3年生、4年生や院生は主にボルダリング班で、学部生への技術的指導および外岩への引率等を担っている。

クライミングウォールの設置で廃部を免れた山岳部であるが、その歩みはまだまだ発展途上である。

アルパインクライミングでは登山班がリード班の3名を含めて7名となって外山に向かう傾向が出てきているが3年生、4年生の参加体制が形成されておらず自立した組織とはなっていない。当面は支援OBによる手厚い指導が必要な状態である。

一方、スポーツクライミングは29名と人数は多いものの目標やチャレンジが見えてこない。外部大会への参加費が高額になることから山岳会との関係が登山班を中心としてきたことから支援要請も無いので希薄な関係となっていた。今後は山岳会としてもスポーツクライミング指向の部員も含めた関係性を築いて挑戦するスポーツクライミングを支援していきたい。

また、両者の融合策も必要と考える。安全登山のためのロープワークや危険回避対策、体力促進、スポーツ医学などの共同の研修、訓練や共同のイベント実施など。

今後、スポーツクライミングとアルパインクライミングのそれぞれの活動の発展と融合に向けて様々な取り組みの上に姿が見えてくると信じている。

とはいえ、新たな山岳部の再構築に向けた歩みは始まっているので、山岳会の会員の皆様にはロングレンジで暖かく見守っていただきたい。

を借りてお礼申し上げます。

昨年度、私が主将を務めるにあたって最も注力しなければいけなかったのは、雪山・沢登りをはじめとした登山に関する技術の継承でした。近年の山岳部の活動はボルダリング等のクライミングが大部分を占めているため、登山に必要な知識を持った部員が今後いなくなる可能性があり、懸念

2024年度総括

2024年度主将 高岡真成

はじめに、昨年度も山岳会の皆様からの様々な面での支援のおかげで部としての活動を滞りなく行うことができ、大変感謝しております。この場

事項となっていました。そこで、年度初めのサークルオリエンテーション及び新歓活動では、登山に興味がある子を積極的に勧誘し、計14名（留学生含む）が入部しました。その後も先輩やOBの方々の協力のもと登山活動を積極的に行い、現2年生を中心とした登山部員を増やすことができました。リードクライミングに関してもビレイ講習会を阪大wallで定期的に実施することで、部内でのリードクライミング普及につながりました。また、ボルダリングでは初の試みとして、外部ジムにホールドのレンタルおよびルートセットを依頼しました。その結果、これまでとは異なるスタイルを取り入れた阪大wallが完成し、部員の練習への意欲を高める効果があったと考えています。

振り返ると2024年度は山岳部の活動の幅が大きく広がる節目の年だったように感じます。次年度もこの流れに乗り、部全体の活性化につなげていけるよう新主将および部全体のサポートをしていきたいと思います。最後になりますが、山岳会の皆様には次年度も引き続き阪大山岳部の活動へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2025年度活動計画

2025年度主将 来馬 輝

2025年度阪大山岳部主将を務めます、来馬輝です。今年度は山岳部を山行班、リード班、ボルダリング班と分類し、それぞれのリーダーが活動を企画していく形をとっています。決して班ごとにメンバーが固定され、別個で活動するわけではなく、各班で計画された内容を部員全員で共有し、山岳部全体として活動しています。実際、今回の新人歓迎山行は山行班の企画ですが、リード班やボルダリング班から多くの部員が参加しています。

主将として、ボルダリング班のリーダーを務めるとともに、各班との連携を通じて活動の円滑化を図り、予算の確保や山岳会との交流にも注力してまいります。縁の下の力持ちとして、山岳部を支えていく所存です

以下に各班の活動内容および活動計画をまとめています。

「ボルダリング班」

主に阪大wallでのボルダリングの主導や、外ジム遠征、外岩遠征を行い、スポーツクライミングおよびボルダリングの技術向上を目指す。

8、9月（夏休み）外ジムに週に1回希望者を募る予定

10月 新入生コンペ

10～12月 外岩

3月 追いコン

「リード班」

主に外岩リードやリードクライミングを主導し、山行にもつながるビレイ技術の向上を目指す。

6、7月 ビレイ講習開催 @ 阪大wall

8月 新入生ビレイ検定取得 @ Dボルダリングプラスリードなんば

9月～11月 東高座岩・新岩

12月～3月 烏帽子岩・不動岩・新岩

ほかにもOBOG主催の岩登りが月3回ほどあり
「山行班」

主に山行全般の主導をする。山行の計画や道具調達、OBの方々との連絡等を行い、山行で必要となる技術向上を目指す。

6月 マルチピッチ練習 沢練習（裏六甲）

7月 堂倉谷

8、9月 沢 縦走 北岳定着

10月末 縦走

11月末 アイゼン合宿

年末年始 凰凰三山縦走

2月 爺ヶ岳東尾根

山行班の活動計画

山行グループリーダー 福岡健志

本年度から新たに編成されました登山班のリーダーを務めさせていただきました、工学部電子情報工学科2年の福岡健志、および工学部地球総合工学科4年の濱田健志です。

さて、本年度より、昨年入部した私たちも山岳部2年となり、新たに意欲あふれる新入生も加わりました。これを機に、昨年度以上に活発な活動を展開していきたいと考えております。

具体的な活動としては、夏季に北岳定着および南アルプス縦走の2つの合宿を予定しており、また、リード班のメンバーを含めて沢登りも計画しています。

さらに積雪期には、新人育成を目的としたアイゼン合宿に加え、鳳凰山縦走や爺ヶ岳東尾根への登山を予定しております。

日常の活動としては、月に2～3回の外岩トレーニング、週1回のミーティングを通じて、登山

技術の共有や山行計画の立案を行っております。

昨年度に引き続き、山岳会の皆様には変わらぬご指導・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

新人歓迎山行(涸沢)報告

山行グループリーダー 福岡健志

【期間】2025.5.2～5.5

【参加者】福岡健志、藤尾修一郎、田川陽斗、松浦傑音、濱田健志、梶原胡春（現役リード班）、山本悠香（現役リード班）、西亮輔（新人）、團野真一朗（新人）、沼本夏輝（新人）、大西啓之（OB）、大倉徹雄（OB）、草尾寛（OB）

【記録】

5月2日

16時半に大阪出発。翌2時にあかんだな駐車場到着

5月3日 快晴

上高地バスターミナル（6:00）－徳沢（8:00）－横尾（9:30）－涸沢テント場（14:00）－雪上訓練（15:30～17:00）

雪上訓練では雪上歩行（キックステップ）、滑落停止（ピッケルストップ）とスタンディングアッカスピレイの訓練を行った。

5月4日 曇

涸沢テント場（6:30）－雪上訓練（7:00～9:00）－2パーティに分かれて行動

涸沢岳アタック組（福岡、藤尾、田川、松浦、濱田、大西、大倉）

－穂高岳山荘（11:15）－涸沢岳（11:30）－穂高岳山荘（12:15）－涸沢テント場（13:30）

待機組（梶原、山本、西、團野、沼本、草尾）

－雪上訓練後テントへ

4時に起床し、ザイテングラード下部の斜面で雪上訓練を行った。主にアイゼンでの歩行訓練とブルージックでの通過を訓練した。その後2パーティに分かれ、現役メンバーとOB2名は涸沢岳を目指す。ザイテングラード右側の斜面を登っているとかなりガスが上がってきた。テント場に戻るまで風はほとんどなかったが眺望が開けることはなかった。

5月5日 快晴

この日は朝から2パーティに分かれた。福岡、藤尾、田川、濱田、大西、大倉の6名で北穂沢から北穂高岳へアタック。前日より急な斜面であり

息が上がりながら登頂する。山頂では360度の大パノラマ。そびえたつ槍に見惚れてしまった。草尾さんの体調不良の知らせを聞き、写真撮影もそこそこに下山。北穂沢から草尾さんの運ばれるヘリがよく見えた。

北穂組 潟沢テント場（5:00）－北穂高岳（8:00）－涸沢テント場（8:30）

別隊は前日の待機組に松浦を加えた7人で前穂高5.6のコルを目指すよていだつた。草尾さんが体調不良のため梶原を付き添わせて、松浦、山本、西、團野、沼本の5名で出発。アイゼントラブルがありつつも問題なく帰幕。

5.6のコル組 潟沢テント場（6:15）－5.6のコル（7:30）－涸沢テント場（8:45）

テント場で合流し草尾さんの装備を分配し下山。後、帰阪

涸沢テント場（10:00）－横尾（13:00）－徳沢（14:45）－上高地（16:30）



新勧宿 潟沢テント場で

新人歓迎山行における事故報告

監督 明神 知

2025年5月2日から5月6日（予備日1日）の日程で、涸沢カールをベースとする新入生勧誘登山において現役支援で参加した草尾理事（工1981）が5月5日朝、体調不良を訴え、嘔吐後、急激に意識を失った。その後、長野県警ヘリコプターにより松本の相澤病院へ搬送された。搬送後の担当医の説明では、外傷や脳挫傷の所見はないものの、CT画像には外傷を示唆する大きな三日月状の血腫が確認された。急性硬膜下血腫の除去

手術を実施し、1ヶ月程度の治療ののち阪大病院に転院して精密検査後に、6月18日彩都リハビリ病院に転院しました。当初は呼吸は安定しているものの意識は戻らず刺激への反応は無かったが見舞いは刺激になるので許可されており、現在は理学療法士のもとで歩行訓練を行っている。

今回の新歓登山には、現役部員（2年生7名：うちリード班3名、新入生3名）およびOB3名、計13名の参加でOB支援が必須であった。

登山は2025年5月2日から5月5日の日程で、涸沢岳への新入生勧誘登山として実施され、初日は草尾OBも涸沢テント場設営後、雪上訓練を実施し、5月4日新入生の白出のコルまでを指導の上、5月5日は五六のコルへの遠足を先導する予定であった。5月5日起床、朝食時までは異常は無かったが、北穂高岳アタック隊出発後に体調不良を訴え遠足隊の出発を遅らせるように要請後、嘔吐して、遠足は現役だけでいくように指示して出発させ、2年生一人がテントに残り付き添った。その後吐いたり、咳き込む様子があり、涸沢ヒュッテの山小屋に救援要請して6時30分頃、長野県警の救急隊が診察を行い山小屋に運ばれ県警のヘリで8時15分に病院に搬送された。

今回の事故発生後、長野県警よりヘリ搬送に関

する連絡が草尾OBのご家族に7時30分頃に入り、その後病院からも連絡があった。在阪連絡先には9時22分に福岡リーダーからLINEで一報が入り、大野会長、理事、アクティブOBへの連絡、モンベル山岳保険への事故発生連絡が行われた。山岳保険は外因性の障害補償を対象としているのでご家族から診断書を届けて頂き審議中だが、5日のテント場からトイレ往復時に滑りやすい箇所が2箇所もあり、朝食後のトイレ往復後に急変していることや三日月状の血腫があることから外傷性を主張して保険請求を要請しているところである。

5月19日には支援OBも含めた山岳部の内部反省会を実施し、山岳会としても理事会を中心に対応救援体制や再発防止に関する論議を深めていくこととする。この議論を踏まえ、高齢OBの健康状態・トレーニング状況の確認も含めた今後の山岳部活動における安全管理体制を見直し、必要に応じて規程改定を行う予定である。

草尾さんは現役担当理事として現役との連絡指導を率先して実施して、この山行においても支援OBのリーダーとして参加時の事故でした。山岳部の公式な山行であったことから今後も、ご家族に対し、山岳会あげての支援を継続するので、会員の皆様の協力をお願いします。

グレートヒマラヤトレイル (GHT) 2024 山行報告

2023年の準備山行を経てよいよロングトレイルの踏破を開始

畠 秀信

【参加メンバー】

畠 秀信 リーダー 1984年 人間科学部卒 62歳
大西 啓之 1987年 人間科学部卒 61歳
石井 洋司 外国語学部学生 23歳

【山行期間】

2024年10月7日から11月1日（25日間、山中は23日間）

【行動概要】

2023年にグレートヒマラヤトレイル（以下、GHT）の東端にあたるカンチェンジュンガ山域を準備山行（GHT2023）としてトレッキングした。今回のGHT2024では、カンチェンジュンガ山域からマカルー山域を跨ぐ、オランチェンゴーラからルンバサンバパス（5,177m）、モルンポカリ（3,954m）、カロポカリ（4,192m）を経て、マ

カルーBCの手前まで行く23日を費やすルートだ。

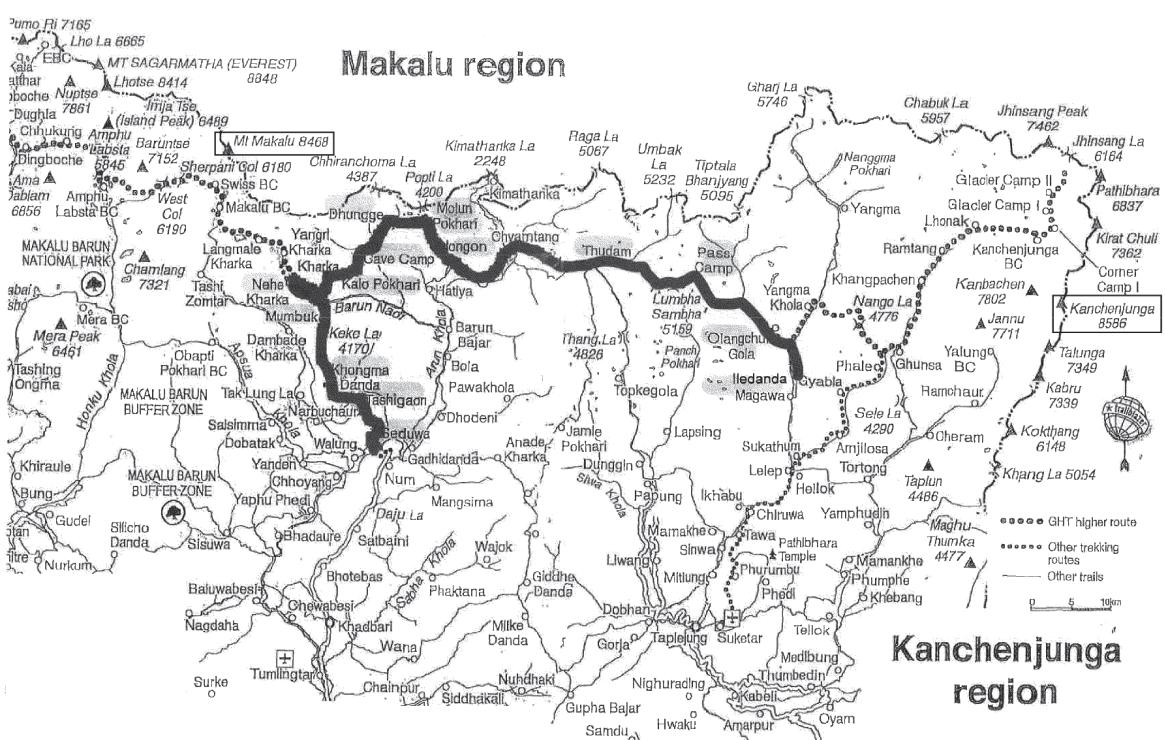
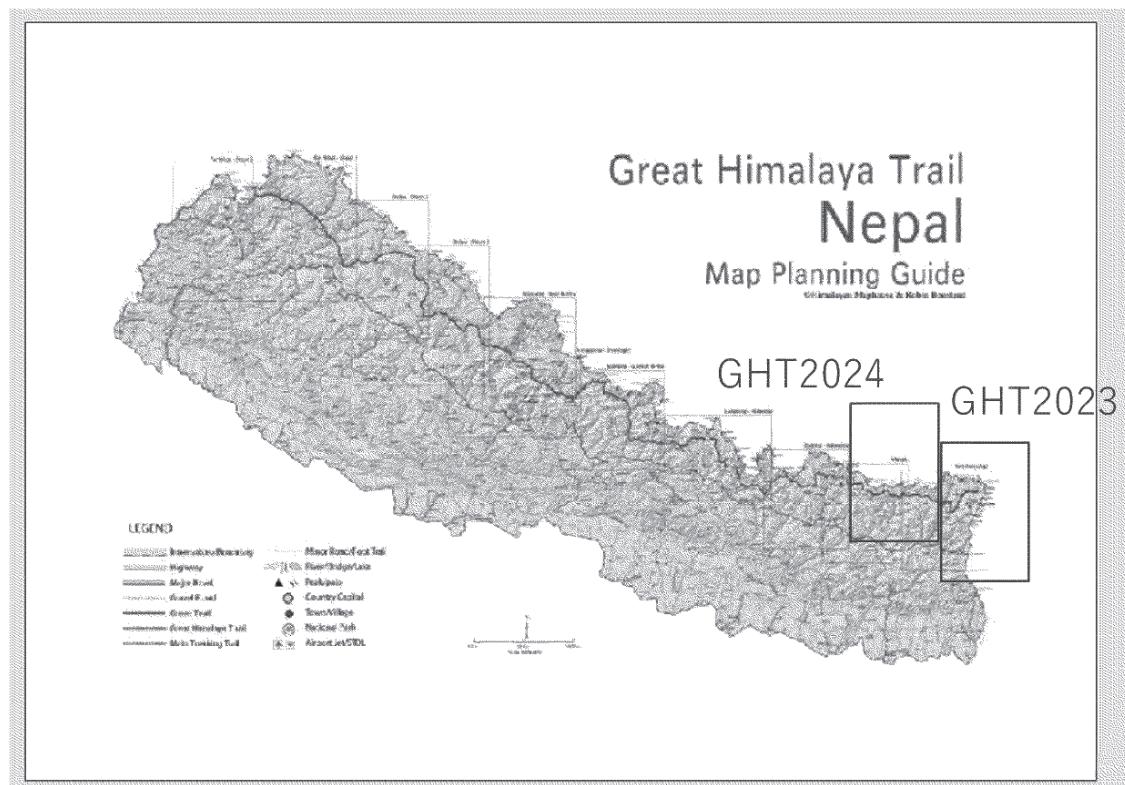
GHT2023のメンバー、畠、大西に加え、野口OB及び現役から石井をメンバーとして準備を開始したが、直前に体調不良から野口OBが不参加となり、畠、大西、石井の3名で決行することになった。今回も2023年同様 Tembas Nepal Trek & Expedition社を旅行代理店に、同社の斡旋するガイド・カサン氏、コック・ドルジェ氏、その他ポーター13人の大人数のパーティとなった。

日本出国の1週間前にネパールで洪水の災害が発生したとのニュースを受け、計画の変更も危惧されたが、現地代理店およびネットでの情報収集の結果、決行可能と判断し予定通り進める決断をした。

今回は、前回と異なりテント泊であったため食

GHT 全図

GHTはネパールを横断する全長1,700kmのトレッキングルート（下図太線）。GHT2023（準備山行）とGHT2024（ルンバサンバ）は四角枠の部分。2025年以降も西方向に継続する計画である。



GHT2024 ルート図（Kanchenjunga region と Makalu Region を合成）

料や燃料を携行したが、ポーターが多数いるため個人のザックは行動時に必要なものだけを持ち7-8kg前後だった。3名に対し、ポーター13人は過剰であったかもしれないが、当初のメンバー4人を想定しての対応だったと思われる。

アプローチはセレプ(2,539m)まで車でに入る予定であったが、モンスーンの洪水で土砂崩れがあり、手前のイレナンド(2,051m)までとなった。ネパールの山道は殆どがダート道であり、モンスーンにより度々道路が壊れるため余裕をもった計画が必要である。

トレッキングの前半のヤマ場は、ルンバサンバパス越えである。土砂崩れのため1日行程が長くなつたが、1日目に取返し、手前のパスキャンプ(4,700m)までに更に1日短縮することができた。ルンバサンバパス越えのタイミングに好天候を得ようとの意図であったが、結果として石井の高度順応が間に合わなかつた可能性があり、リーダーとして配慮に欠けていたことは否めない。ただ、行程を早めたお蔭で、パスキャンプではクンバカルナ(ジャヌー)からの神々しいほど美しい日の出を拝むことができた。今回のルート前半のハイライトを目の当たりにし高揚感が最高潮に達したのは私だけではないはずだ。

ルンバサンバパスからの下降では、石井の体力消耗が激しいため、できるだけ高度を下げた方が良いとのガイドの助言もあり一旦設営したテントを撤収して、ヤクカルカ(4,595m)まで高度を下げた。結果として翌日から石井の体調も回復し、今回の成功につながつた。ガイドとポーターの献身的なサポートに改めて感謝したい。

中盤のハイライトであるモルンポカリ(3,954M)での展望やチベット国境、ポプティラへのアタック、カロポカリ((4,152m)での展望を期待していたが、ガスや早朝の降雪など天候に恵まれずガスに包まれたポカリ(池)を見るのみとなつた。この時、1週間程度は積雪のため我々の後続はルンバサンバパスの通過が出来なかつたとの情報もあり、むしろ我々は幸運であったのかもしれない。

今回のルートはGHTの他の人気ルートとは異なり、トレッカーも少なく、道も整備されていないことからルートファインディングには気を使つた。このエリアの12万分の1の地図は極めて不正確であつてにならない。モルンポカリからネヘカルカまでは、5日間人に会うこともなく、また我々の隊には、この区間を歩いた経験者もいないため

ほとんど情報のない手探りでのトレッキングとなつた。事実、モルンポカリからドンギーカルカの間では、道を間違え、深いシャクナゲの中を藪漕ぎしながら進むという失態を演じてしまつた。後で我々の後ろにいたスペイン隊も2日間道に迷つたという話を聞いた時は、まだ我々の方が軽傷だったと知り少し安心したが。

10月23日のレイリーカルカの朝から天候も安定し、10月24日からはマカルーを見ながらのトレッキングとなつた。

当初予定をしていたバルンドバンへのルートの通行が困難との情報で、予定を変更してトレッカーが多く行き交うマカルーBC街道を下山することとした。さすがに人気の街道だけあって、道中のツツラ(別名、シンプトンパス)からはマカルー、コムラダからはカンチェンジュンガ、シャルプからの日の出を見ることができた。

ヌムからアルンナディの吊り橋まで車道が伸びているということで、アルンナディまで下りることで我々のトレッキングは終了となつた。その後カトマンズまでの飛行機が欠航となり、別の飛行場へ移動するはめとなるハプニングのおまけまで付いたが。

【総括】

今回のルートは記録が少なく、途中に泊まれる村もない僻地を辿るためルートファインディングにも気をつけなければならず、2023年と比べ精神的なプレッシャーが大きかつた。それでも準備山行で最近のネパールのトレッキング事情を把握し、環境にも慣れていたことは大きな支えであった。

長期間のある意味で単純作業とも言えるトレッキングには、焦る気持ちは禁物で、天候不順や毎日の単調な行動パターンをも楽しめる余裕が必要となる。仲間やガイド、ポーターとのコミュニケーションをうまくとることも重要である。そういう点では今回のトレッキングは極めて順調に運んだと思う。国内の短期の山行では、決して得られない経験であった。

年齢を重ねるにつれ体力は衰えるが、こういった忍耐力や生活術は齢とともに熟達していくものであると信じ、諦めることなく日ごろの訓練も励んでいきたいと思う。

次回のGHT2025は6,000mの峠越えを含むGHT最大の難コースである。それだけにやりがいも大きい。若い後輩達を奮い立たせるような素晴らしい報告ができるご期待ください。

最後に今回の我々の山行にご支援戴いた多くの方々に深く感謝いたします。

【メンバーの感想】

大西 啓之

山行期間が23日と長く不安もあったが、終わってみるとあつという間であった。

今回は前年に比べ天気の悪い日が多く、雨が降る^ト山蛭（ズガ）の襲来に閉口したが、ルンバサンバパス手前、パスキャンプからはジャヌー（クンバカルナ）からの日の出、ヤクカルカ、ネエカルカとマカルーが少しづつ近づいてくる眺望、モンンポカリ、カロポカリでの一瞬の晴れ間に見えた

絶景など印象に残るものだった。

ガイド、コック、ポーターが総勢15名とToo Muchな編成とはなったが、彼らとの触れ合いはそれなりにまた楽しかった。

GHT2025は、よりルートはハードになる。体調管理をしながら、しっかりトレーニングをして臨みたい。

石井 洋司

この23日間のGHT2024遠征は、最高地点5177mに達する人生最大の冒險でした。辛く厳しい瞬間もありましたが、楽しさが勝り、あつという間に過ぎた貴重な体験となりました。しか



10/12、パスキャンプからクンバカルナ（ジャヌー）の日の出を望む



ルンバサンバパスで、ガイド、ポーターとの記念撮影。ポーターはプレゼントしたTシャツを着てくれている。



ルンバサンバパスからカンチェンジュンガ、クンバカルナを見る。残念ながらカンチ主峰は雲の中。カンバチェンは見ることができた



10/13、ヤクカルカから少し下りた場所からマカルーがきれいに見える



ルンバサンバパスで、ガイド、ポーターとの記念撮影。
ポーターはプレゼントしたTシャツを着てくれている。



10/13、ヤクカルカから少し下りた
場所からマカルーがきれいに見える



10/26、ツツラからのマカルー



10/27、コムランダから
カンチェンジュンガを遠望。

し、多くの反省点もありました。最大の課題は体力不足で、出発前に低酸素トレーニングを実施すべきでした。また、基本的な歩行技術の未熟さにより、無駄な体力消耗を招いた面もあります。今後GHTを目指す後輩には、高地順応のため閉山期の富士山でのビバーク訓練を強く推奨したいと思います。適切な準備により、より効率的で安全な登山が可能になるはずです。

それでも、この登山は人生で忘れない経験となりました。授業調整や費用調達は困難ですが、挑戦したい気持ちがある後輩には、ぜひ行くことを勧めます。ヒマラヤの雄大な山々は写真では表現しきれない神秘性を持ち、世界中の登山家が憧

れる理由を肌で感じられるでしょう。技術面での準備不足は反省点ですが、それを上回る価値と感動がこの遠征にはありました。

GHT2024 参加の石井君への 支援カンパ報告

GHT2024へ現役の石井君が参加し、記念事業費から渡航費を支出しているが、現役の参加費捻出は困難であろうということで、記念集会会場において支援カンパが呼びかけられた。その後、メールでの呼びかけもあり、会員24人からのカン

パ、総額 29 万 9500 円が集められた。会員の支援者は以下の通り（50 音順）。

出雲路、今村、上松、大倉、大宅、大西、大野、奥山、尾崎、笠松、木嶋、草尾、河野、佐藤、科野、東條、朽尾、畑、畑中、松尾、溝西、明神、山田、山本

2024 総会報告

既報（会報 No.26）のように、2024 年の山岳会総会は、6 月 15 日の 75 周年記念集会の前段、12:00 から大阪大学銀杏会館（吹田キャンパス）で開催された。記念集会の前ということで、近年にない 26 人の出席がありました。また、これまで通り書面によるものも併用しています。提案された 6 議案は役員改選を除き書面回答を含む 52 人全員、役員改選は 51 人の了承をいただき、提案された 6 議案はすべて了承された。

2024 白馬集会中止

2024 年の白馬集会は 8 月 31 日に白馬村の対岳館で実施予定であったが、台風の接近が予想され、JR や高速道路の不通が予想されたため、中止となつた。白馬集会の中止はコロナ蔓延の期間を除きはじめて。

榊原理事から 現役へ登山用具の寄付

榊原理事はこれまでマラソンと登山活動を並行して行っていたが。この度、登山活動をやめることで、手持ちの登山装備を山岳部に寄付された。主なものは以下の通り。

50m ハーフロープ、スクリュー、カラビナ、ハーケン、フルハーネス、クライミングシューズ、登山靴、ザック（65L）、アックス、アイゼン、ビーコン、トランシーバなど 58 品目。

会員動静

木村裕一（経 1956）（娘さんより）

父は元気にしております。2 年前、対岳館で皆様にお会いしたことを今でも話しています。庄司さん、哲也さんにもよろしくお伝えください。

兼清喜雄（工 1960）

年のために体力が劣化して来ていますが、毎週の軽登山、ゴルフを続けています。

高橋雄二（工 1962）

85 歳を超えて、山岳関係もこの OUMC の記録を見て楽しむ範囲に狭まってきた。

白井達郎（工 1962）

年初に心不全が悪化し、歩行にも苦労しましたが、現在は若干改善し日々過ごしております。皆様のご健康を祈ります。

前澤祐一（工 1962）

体調面に支障があり、不活発な状況です。

笠松卓爾（医 1963）

胆管ガン手術日の 7/15 を入れて 10 日間、City of Hope(COH) に入院の後、ついさっきボルドウインにある Arcadia Care Center に来ました。1 週間ほどここでもっと体力をつける目的。手術はうまく行きました。後は本人の意思次第。ハーフ・マラソンを走る夢を追って。私の仕事は 食べて 歩くこと。

今頑張れるのは山登りで鍛えたお陰と思っています。

吉川信也（理 1965）

相変わらず悠々自適に程遠い忙しさを楽しんでいます。

豊坂昭宏（医 1966）

まだ病院に勤務しています。そろそろ引退の時期かとも考えている。院長をしているが、医員、看護師等兼務である。日本の病院は現在大変な時期です。コロナ感染後、諸物価の上昇に対して診療報酬の相対的低下、看護師・介護士の絶対的不足、人件費の上昇等でほとんどの病院が赤字で、大病院でも倒産の報告が相次いでいる。

5 月八ヶ岳に行つたが、アイゼンの前後の連結部分が切断、退却となつた。2-3 年前に好日山荘で買ったものだが、こんなに簡単に折れるようでは困る。

出雲路敬孝（工 1967）

最近は高くて険しい山は止めて専ら街道歩きに励んでいます。久しぶりに横尾先輩と6月の梅雨入り直前に安達太良山（福島県）に登ってきました。しんどかった。

畠中 薫（医 1969）

2016年に肺癌での右肺上葉切除、2023年にペースメーカー留置を受け、元気に生かされています。週2.5日は病院勤務で入院患者さんの精神科医療を担当しています。また、週1回づつキリスト教会と太極拳教室に通っています。

黒田治朗（医 1969）

昨年末で泌尿器科勤務を終えましたが、老健の仕事を週1回続けています。ゴルフはなおエージュートを目指して頑張っています。

中岡和哉（医 1971）

一応元気に暮らしております。山は近所の丘（高砂と加古川の間にある高御位山）に年に1～2回行っています。

鹿野信吾（理 1971）

この8月でクリニックを退職します。時間が自由になり、いろいろと計画中です。楽しみです。よろしくお願ひします。

井上太一（理 1973）

この10年間毎週火曜日、仲間とボウリング3ゲームしてチーム対抗戦を楽しんでいます。昨年は200越えは17回ありました。このスポーツは足腰が命なので、そのため毎週1回は近くの高尾山に登って体幹を鍛えています。最近のアベレージは160～170位です。

今年の夏、乗鞍岳に登りますが、中1と小5の孫にせがまれ、富士山か北岳に登ることになりそうです。

佐野威和雄（理 1978）

対馬白嶽（518m）に登りました。しっかりバテました。

明神 知（基 1978）

70歳定年で北海道情報大学を退職し神戸に帰郷。4月から家内の管理下で毎朝ジム通いで減量中。5月の草尾理事の事故では関係各位のご尽力により阪大病院から彩都リハビリ病院へ。声かけに反応するなど回復の兆しに希望を繋いでいます。6月には34日間6カ国世界一周（次男インペリアル卒業式、定年記念、サグラダファミリア、マッターホルン遠望、カタール航空搭乗、ハワイの癒し）。現役は支援OBの参加を得て夏山準備

中。伝統継承とスポーツクライミング指向の融合に取り組み中です。

木嶋良雄（工 1979）

今春、日本原燃株を定年退職。地元草津に戻ってきました。

後藤正教（法 1979）

心臓が徐々に弱っているそうなので、無理をしないようボチボチ生きております。

大石真也（工 1983）

膝と腰を痛め、現在登山はできません。

奥山宏臣（医 1984）

4月より鳥取大学に勤務しております。月に2-3回は大阪に帰っています。6月には大山に登りました。今後ともよろしくお願ひします。大山に登りに来てください。

編集後記

今年3月末で山岳部長であった奥山常務理事が医学部を定年退職したため、新しい山岳部長として医学部の奥野准教授を迎えることになりました。新体制早々に、5月の新人歓迎山行において山岳担当理事の草尾君が涸沢で体調不良で倒れ、長野県警のヘリで緊急搬送される事態が発生し、これらをまとめての編集作業を行うことになりました。

山岳部員も増え、今年度からは新しい体制での活動をはじめるとの新主将の抱負もあり、今後の現役の活動を見守っていきたいものです。

75周年記念事業の一つであるGHTは、昨年は現役の石井君が参加し、久々のエポックメイキングな海外山行となったことは喜ばしい限りです。今後も現役が積極的に参加できる環境を作りたいものです。

（編集担当 山田）

